語　彙（史的研究）

田　中　牧　郎

1998・1999年に発表された著書・論文のなかから，語彙の史的研究の分野に属すると考えてリストアップした400点余りの中から，特に重要あるいは新鮮だと思われるものについて取り上げることとしたい。この分野を，まず大きく〈語の研究〉〈語彙の総体の研究〉の二つに分け，さらに，前者を〈語構成〉〈意味〉〈資料・文体・位相〉〈受容・交流〉の四つに，後者を〈計量〉〈辞書〉の二つに分けることにする。もとより便宜的な枠組みに過ぎず，この枠組みをとることでこぼれ落ちてしまう著作についてはお許し願いたい。なお，以下の略称を用いる。『語彙史』17＝『国語語彙史の研究』17(和泉書院，1998.10)，『語彙史』18＝『国語語彙史の研究』18（和泉書院，1999.3)，『東大』＝『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』（汲古書院，1998.2)，『中古』＝『国語論究7 中古語の研究』(明治書院，1998.12)，『新研究』＝『語彙・語法の新研究』（明治書院，1999.9)。

1.　語の研究

1.1　語構成

古代語の語構成論に取り組んできた蜂矢真郷の最初の研究集成である，『国語重複語の語構成論的研究』（塙書房，1998.4）が刊行された。重複語を「他の複合語のもつ諸性格の原初あるいは潜勢としての性格を負っている」と見て，語構成研究の出発点と位置づける。今期の蜂矢は「形容詞語幹の用法」（『井手至先生古稀記念論文集 国語国文学藻』和泉書院，1999.12）等，語幹の構成に関する論文を数多く発表しており，次の集成も遠くないと思われる。本書に触発されるかのように，今期は語構成研究に見るべき成果が多かった。

まず，接辞の意味や機能を語基のタイプによって分類し，時代差を明らかにしようとする論文に，岩村恵美子「ナシ(甚)型形容詞続考――上代～中世の例を中心に――」（『語彙史』17)，村田菜穂子「ゲナリ型形容動詞――造語力拡大の様相について――」（『語彙史』18)，漆谷広樹「「～にくし」と「～がたし」――平安和文以降の状況――」（同)，舘谷笑子「接尾語コシの成立過程」（『待兼山論叢』33文学篇，1999.12)，の四つがある。いずれも，独自の視点から語基のタイプに差異があることを明示したおもしろい論文であるが，差異を語構成論的に解釈するまでには至っていない。一方，勝田耕起「中古におけるメクとダツ――観念性と即物性――」（東北大学『国語学研究』38,1999.3）は，語基のタイプだけにとどまらず，文脈的特徴の分析を綿密に行って，接辞の意味を記述して有益であるが，接辞と語基の意味関係には肉

迫しない。その点，青木博史「カス型動詞の消長」(『国語国文』67-7,1998.7)，「デカスの成立」(『語彙史』17) は，カス型動詞における語基と接辞の意味関係の歴史に，「自他」の枠組みから明確な図式を提示している。これは文法論に足場を置く研究で，語彙論としてはまた別の方向が考えられるであろう。「用法史」という枠組みで，接辞「体」と名詞「体」の現象を関連づけようとする，岡部泰子「みぎてい・つねてい・ありてい――後項に「体（てい）」を持つ熟語群から――」(『語彙史』18)，「義強(ぎごは)ナ」のナを接尾辞ナシと連合的に関連づける，橋本行洋「“ぎごは（義強）”の語史――その成立，及び“ぎごつなし”との関わりを中心に――」(同) は，いずれも簡単に体系化できるタイプの研究ではないが，記述を積み重ねて語彙論的におもしろくなるのは，案外こういう方向にもあるのかもしれない。

複合動詞論では，山王丸有紀「古典語複合動詞の研究」(『成蹊人文研究』7,1999.3) は，前後項の動詞の意味範疇と主文における格関係の主従とを相関させて，結合の規則を見出そうとする。個別の語を扱うものでは，小島聡子「複合動詞後項「行く」の変遷」(『国語と国文学』76-4,1999.4) が，中古から中世への「一行く」の意味と補助動詞化の相関を，前項動詞の整理を通して描き出す。近藤明「中古における「ウチ＋主体変化動詞」の意味」(『中古』) は，後項動詞の種類ごとにウチの意味を分析する一環である。

活用現象を扱うものとして，坪井美樹「《大》と《多》――平安和文における〈オホカリ〉の使用について――」(『文芸言語研究・言語篇』35,1999.3)，山内洋一郎「「おほ」(大・多) の変遷――「大きなり」「多し」「多かり」「大きい」をつないで――」(『語彙史』18) は，ともに，オオキナリ (大) とオオカリ (多) の意味による活用の分化を大きなスケールでとらえ直す。こまつひでお「寝ラえぬに・恋ふラく考――疑似四段活用未然形語尾ラの消長――」(『東大』) は，従来別々に説明されていた表題語句の二つのラを関連づけ，現代語のラ抜き言葉までを見通す，注目すべき論文である。

語源に関わるものでは，横井博「日本語キと朝鮮語 namk (木)」(早稲田大『人文社会学研究』39,1999.3)，川本崇雄「あきつ (蜻蛉) の語源」(創価大『日本語日本文学』8,1998.3)，柳田征司「沖縄方言の史的位置 (上) (下)――「キ」(木)「ウキ」(起き)「ウリ」(降り) などの問題――」(『国語国文』68-4・5,1999.4・5) が，それぞれ，朝鮮語，オーストロネシア語，沖縄方言を扱って系統論の観点から語彙の対応を検討する。古代語における個別の語源を考える論文にも，吉野政治「ト (甲類) 考――時点を表わす古語――」(『文学・語学』161,1998.10)，山口佳紀「武烈紀・歌垣歌謡の解釈――「なをあましじみ」の句を中心に――」(『声と文字上代文学へのアプローチ』塙書房，1999.11) など，着実な積み重ねがある。亀井孝『お馬ひんひん――語源を探る愉しみ――』(朝日新聞社，1998.12) は，語源に関わる論文を集めたもの。山口佳紀編『暮らしのことば語源辞典』(講談社，1998.5) は，語史記述も取り入れた，今までにないタイプの語源辞典である。

1.2　語の意味

前期展望で山本真吾は，「今期最も注目に値する業績」に「基礎語に関する研究」をあげたが，この方面の開拓に意欲的な日野資純は，本誌特集「国語史研究の方向」に「国語史研究の一方向――基礎語史研究の意義とその実践――」（『国語学』196,1999.3）を発表し，基礎語を扱うことで通史を描くことを主張する。土佐日記の「かくあるうちに」の通説を覆すことを端緒に，ウチとナカの意味変遷と交錯を記述する。古代から近代までの用例を，資料性に目配りしながら解釈していく作業は，山本が「多大の困難を伴う」と述べた通りで，個々の資料の扱い方や用例の解釈には異論も出やすい。この，資料と解釈の問題をどう乗り越えるかは，語の意味の史的研究にとっての難題であるが，資料については次項で見ることとし，まず解釈に関わる論考について見ていきたい。

吉田光浩「形容詞「ものし」の語義」（『大妻国文』30,1999.3）が，「ものし」に評価的意味を発見し，熊谷由美子「『源氏物語』における「つらし」「つれなし」「うらめし」の語義について」（愛知大学『国文学』37,1998.3）が，三語の意味の本質的差異を発見するのは，旧来の語義研究の流れにあるすぐれた研究である。この種の研究は，個々の用例の解釈を積み重ね一般化を行って語義を記述する手順をとるが，解釈の適否を検証するには，用例を本文に還して解釈し直すところまで戻らざるえない。また，一般化を行う規準についても明示的ではなく，扱う現象に応じて恣意的になる傾向は否めない。日野がいうように，斉一性に着眼して通史を描こうとすれば，語や時代の別を越えて，解釈や一般化が検証し合える枠組みがほしい。そのような枠組みは一朝一夕には得られないが，語の意味をどのようなものととらえ，どう記述するかを，定式化する姿勢が必要だと思う。

そうした姿勢がはっきりとうかがえる論文に，語の意味と文脈の意味との区別と相互関係を見きわめる，宮武利江「〈にほひ・にほふ〉の表現価値――源氏物語に見る――」（『東京成徳短期大学紀要』31,1998.3）があり，動詞から副詞への転成が「連想的意味」によるつながりによってたどりうるとした，高橋光子「副詞「決して」の成立」（『国語と国文学』75-10,1998.10）がある。田中牧郎「源氏物語のウレシとカナシ――情意形容詞の統語情報の整理――」（『新研究』）は，統語的な情報を整理して語の意味に到達する方法を模索するものである。小野正弘「「意味本質観」と「意味情報観」――日本語の意味変化を考えるために――」（『鶴見大学紀要』36-1,1999.3）は，語の意味を情報の束と扱って記述を行うことが，意味変化の記述には有用であることを説く。いずれも今のところ試論の段階であるが，今後は，語の意味の史的研究にも記述方法自体を問う姿勢はいっそう必要になるであろう。現代語の語意味論の領域で，渡辺実「多義語の意義の位置づけ」（『東大』），国広哲弥「日本語動詞の多義体系（1）（2）」（神奈川大学『人文学研究所報』32,1999.3，神奈川大学『人文研究』138,1999.12），山田進「多義語の意味記述についての覚え書き」（『聖心女子大学論叢』92,1999.2）など，語の意味をどういう方法で記述するか，飽くなき追究が続けられてい

ることも参考になる。

ただ，古典語の場合，文脈や文型の分析を尽くしていくことが難しい事情もある。上代語や漢文資料などでは，現れる文脈や文型が偏ったり，文脈や文型の把握が困難であったりする。その意味で，角度を変えて語の意味分析に向かう方法を示す，手慣れた次の論考には学ぶべきである。内田賢徳「古辞書の訓詁と万葉歌」(『国語と国文学』75-5,1998.5)，峰岸明「漢語解義の諸方法」(『東大』) は，方向は異なるが，ともに古辞書の和訓や義注を積極的かつ批判的に利用する実践を示し，説得力に満ちている。

1.3 資料，文体，位相

次に，語の歴史を研究するための資料について考えたい。関連して，文体，位相にも触れる。資料性という場合，どのような層の言語を反映しているかという問題と，どのような言語行為を目的とするものかという問題がある。前者を扱う，山口佳紀「古事記歌謡の古語性について」(『東大』)，増田繁夫「古今集の歌語と本文――「たたる・たてる」「あとらふ・あつらふ」「うらぶる・うらびる」――」(『大阪市立大学創立五十周年記念国語国文学論集』和泉書院，1999.6) によれば，古事記歌謡や定家本以前の古今集に，古い層の語が混在することを指摘し，使い慣れた文献にも，語の層を解きほぐす余地があることがわかる。

資料に特徴的な言語行為を反映した用語を問題にする論として，辛島美絵「仮名文書の形容詞（二）（三）（四）」(『九州産業大学国際文化学部紀要』11・12・13,1998.3・7・1999.1) は，『鎌倉遺文古文書編』の仮名文書における高頻度形容詞の用法を記述するものであるが，その特徴の多くは書状特有の言語行為に結びつけて説明される。古文書の台帳・目録に特有の「都合」を扱う，原卓志「「都合」の意味・用法について」(『鎌倉時代語研究』22，武蔵野書院，1999.5) や，官制用語としての「覧」を分析する，穐田定樹「平安時代儀制書における「覧」」(『京都語文』3,1998.10)，さらに，表白と願文の用語を対比する，山本真吾「表白・願文の用語選択――金沢文庫本『言泉集』の記述をめぐって――」(『訓点語と訓点資料』102,1999.3) など，多彩な論考があり，興味が尽きない。あまり活用されてこなかった資料については，こうした分析によって用語の特性が解明され，その特性を生かした語彙の情報源として，活用することが期待できよう。

資料の新しい切り口が光ったものに，キリシタン文献があげられる。翻訳行為の視点から見直す，鈴木広光「翻訳書としてのキリシタン文献」(『日本語学』17-6,1998.6) のほか，米井力也『キリシタンの文学』(平凡社，1998.9)，小林千草「天の甘味・甘露・値遇・ひとしく――『こんてむつすむん地』の用語より――」(『近代語研究』10,武蔵野書院，1999.10) も，文献の本質をつく語の分析に満ちている。また，松岡洸司「ゴメス著『講義要綱』の翻訳語彙――二儀略説をめぐって――」(『上智大学国文学科紀要』16,1999.3) は，表題の新資料をもとに，17 世紀初めの自然科学用語を記述している。室町文献全般を扱う，安田章「資料性の検証」(『国語学』196,1999.3) も読みごたえがある。語を研究するために特化した資

料論で，小野正弘「語史資料としての『仮名文章娘節用』」（『鶴見日本文学』2,1998.3）は，「語史」の観点から資料を語り，豊饒な世界を予感させる。岡島昭浩「漢語資料としての詩学書――『詩語砕金』を例として――」（九州大学『語文研究』86・87,1999.6）は，詩学書の価値が高いことを実証し，近世の漢文資料の重要性を述べる。

特定の時代や資料群における事象を記述した論文を主体として一書にまとめた研究書のうち，語彙に関わる重要な論文が再編されたものをあげると，まず，古代では，馬渕和夫『古代日本語の姿』（武蔵野書院，1999.1），工藤力男『日本語史の諸相』（汲古書院，1999.8），佐藤亨『国語語彙の史的研究』（おうふう，1999.5），神谷かをる『古今和歌集用語の語彙的研究』（和泉書院，1999.3），山口仲美『平安朝の言葉と文体』（風間書房，1998.6）。山口著書における新規執筆の3章は，源氏物語の女性語，雅語・卑俗語，漢語を記述するもので，平安文学を資料とした語彙研究が今後進むべき方向の一つが示されている。中世では，坂詰力治『国語史の中世論攷』（笠間書院，1999.1），鈴木博『国語史叢考』（清文堂，1998.9）のほか，蜂谷清人『狂言の国語史的研究――流動の諸相――』（明治書院，1998.12）では，飲食動詞や女性の呼称を分析する新規執筆の章をおさめ，狂言の用語の「流動」のさまが活写されている。近世以後では，京極興一『近代日本語の研究』（東宛社，1998.5）がある。

語の分析を通して，作品の文体論を指向する研究がある。中川正美『源氏物語文体攷――形容詞語彙から――』（和泉書院，1999.10）は，特定の語（「うし」「心うし」）に視野を絞っていくことで，源氏物語の文体を浮かび上がらせる試みである。別に，中川は語の分析を展開する方面でも成果をあげており（「源氏物語の文体――めざまし――」（『国語年誌』17,1999.2），「語彙と文体――源氏物語と紫式部日記――」（『源氏物語研究集成』4，風間書房，1999.9）など），本書からは排除した語彙の広がりを今後どのように取り込むかに，語彙論と文体論のはざまで魅力ある位置を占め続けるための鍵がありそうである。本書に類する方向は，文学畑の研究者によって多彩に進められており，語学の側からも看過できない成果が集積されている。その動向は，例えば，小町谷照彦・三角洋一責任編集『歌ことばの歴史』（笠間書院，1998.5），鈴木日出男編『ことばが拓く古代文学史』（笠間書院，1999.3）などに寄せられた論文から，うかがい知ることができる。久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店，1999.5），片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』（笠間書院，1999.6），秋山虔編『王朝語辞典』（東京大学出版会，2000.3）など，辞典の刊行が相次いだことにも，機運の高まりが現れており，古典のデータベースの整備が進む昨今，文学研究者も用語の問題に高い関心を寄せている。今西祐一郎『源氏物語覚書』（岩波書店，1998.7），河添房江『源氏物語表現史』（翰林書房，1998.3）などは，作品の中で語を追いかけることの意味を教えてくれる。「国語学（国語史）が古典学の先端領域で頼りにされない」（釘貫亨「日本語史の可能性と「国語史」」（『国語学』196,1999.3））という認識を克服して，語学と文学のはざまに発信して効果があるのは，まずは，この領域であろう。

語学に戻る。遠藤好英「「徒然」の語史――文章史の観点から見た問題点――」(『日本文学ノート』33,1998.1),「平安時代の記録体の文章の性格 上」(同 34,1999.1),「漢語「徒然」の語史――和化漢語の成立まで――」(日本文芸研究会『文芸研究』147,1999,3) は,「徒然」一語に視座を定め,その用法の異なりから日本・中国の文章の広がりを考える。青木毅「平安・鎌倉時代における〈剃髪〉を表す類義動詞句の変遷について」(『徳島文理大学文学論叢』15,1998.3),土居裕美子「平安・鎌倉時代における「きしろふ」の意味・用法について――「きほふ」「あらそふ」との比較を通して――」(比治山大学『日本語文化研究』創刊号,1998.12) は,表題の類義語 (句) に文体・時期・用法等の偏りがあることを示すが,文体を論じるのか語彙を論じるのかは明確でない。和漢の文体が錯綜する時代のこうした整理の積み重ねは重要であるが,どういう観点で記述するかが問われる。

資料や文体による差異を問題にする方向は,位相の問題にもつながる。小林隆「コマ (駒) の位相――方言研究から国語史へ――」(『国語学』196,1999.3),「「雄馬」の語史――コマの歴史的位置を中心に――」(『新研究』) は,文献上の分布と方言分布とを突き合わせ,上層と庶民層との位相的な広がりをもった語の歴史を描く。小林は,庶民層の口頭語における同音衝突を指摘した「オトツイとオトトイ――万葉語復活の原因――」(『万葉集の世界とその展開』白帝社,1998.4) という,鮮やかな論文も書いている。方言分布を文献語彙史に関連づける研究は,安部清哉「古代日本語における古い語彙・音韻と新しい語彙・音韻の比較研究の可能性」(『新研究』) によっても進められている。また,迫野虔徳『文献方言史研究』(清文堂,1998.2) では,文献を用いた方言語彙史を指向する論文がまとめられている。方言的な差異以外にも位相の観点から問題を設定する論考もあったが,「際限なく生じてくる位相的な差異・対立」について「日本語の形成に大きな影響を与えたと考えられる位相上の問題を中心にすえ」て一書にまとめあげた,田中章夫『日本語の位相と位相差』(明治書院,1999.9) が,よるべき指針となろう。

1.4 受容,交流

他言語からの語の受容や語彙交流の問題も,語彙の史的研究の中心を占める研究テーマであり,今期もさまざまな成果があった。まず,漢語研究の専書が,浅野敏彦『国語史のなかの漢語』(和泉書院,1998.2),小島憲之『漢語逍遙』(岩波書店,1998.3),村上雅孝『近世初期漢字文化の世界』(明治書院,1998.3),佐藤喜代治『漢語漢字の研究』(明治書院,1998.5) と,相次いで刊行された。いずれも,多年にわたり未開拓の文献に挑んできた成果がまとめあげられたもので,後進にとっての必読書ばかりである。

外来要素としての漢語が,日本語にどう同化していくのかという問題に自覚的な漢語研究の論文は,「日本漢語」と呼ぶべき外延を定める,柏谷嘉弘「日本漢語」(『東大』),日中の漢語の語構成の相違を幅広く検討する,陳力衛「語構成から見る和製漢語の特質」(同)。田島優『近代漢字表記語の研究』(和泉書院,1998.11) は,日本語における漢語の位

置を考える場合に有益な考察を集成する。また，宮島達夫「日本語とドイツ語の語彙史の比較」（『国語と国文学』76-1,1999.1），「日本語とドイツ語の語彙史の比較（続）」（『京都橘女子大学研究紀要』25,1999.1）は，著名な宮島「近代語いの形成」（国立国語研究所論集『ことばの研究』3,1967.8）に欠けていたドイツ語の調査を行って，日本語における語彙受容の歴史を，諸言語と対比して数量的に把握することができるようにした，大変有益な論文である。佐藤武義「外来語受容融合の一面」（『文学・語学』162,1999.3）も，外来語受容史を広い視野からとらえ直す。

変体漢文に特徴的な用語と言われてきたものを，中国文献にまで遡ってその用法を日本文献と対照し，漢語受容史のなかに定位し直そうとするものに，後藤英次「『小右記』『御堂関白記』における接頭語「相（アヒ）」――記録体資料における接頭語「相（アヒ）」(一)――」（『新研究』），舩城俊太郎「「了（ヲハンヌ）」考――〈変体漢文〉研究史にまでおよぶ――」（新潟大学『人文科学研究』100,1999.8）がある。近代漢語の研究で，深い洞察や論証方法に教えられるところが大きかった論文をあげると，鈴木丹士郎「明治期漢語の品詞性と語形についての一考察」（『東大』），松井利彦「幕末の多字漢語」（『近代語研究』10,1999.10），青田寿美「Tragedy, Comedy の訳語誌」（『語彙史』17），浅野敏彦「漢語「運動」の語義変化――日本漢語の語義変化と明清俗語――」（同），山田俊雄「国語辞典を読む――和漢洋にわたる語について――」（『国文鶴見』33,1998.12）などである。

中国語との交流に関しては，荒川清秀「日本漢語の中国語への流入」（『日本語学』17-6,1998.5）が導きとなるほか，朱京偉「日本の近代音楽用語の成立と中国語に与える影響」（『明海日本語』4,1998.3）も興味深い。韓国語との交流については，李漢燮「朴泳孝の建白書に現れる日本漢語について――近代における日韓両語の出合いを探るため――」（『語彙史』17）が，人的交流を通して日本漢語が韓国語に取り入れられていることを具体的に示しており，新鮮である。交流の実態を把握する以前の各言語における記述が不徹底なために，論証が十分果たせていない論考も目についたが，陳誼・山内洋一郎「日中両国語における「―着」について」（『奈良教育大学紀要』47-1,1998.4）は，その点への配慮が行き届いており，安心して読むことができる。

2.　語彙の総体の研究

2.1　計量

ここでは，まとまった語彙の分布を数量的に扱う研究を概観する。まず，今期も田島毓堂の意欲的な活動が際立った。新たな動きは，「比較語彙研究」をテーマに国際シンポジウムを開催したこと（名古屋大学文学部創設50周年記念協賛国際シンポジウム 1998.10.31―1998.11.1）と，研究のエッセンスを『比較語彙研究序説』（笠間書院，1999.10）にまとめたことである。時代間の語彙を比較することによって語彙史研究に貢献できるとするが，この方法による語彙史の記述を実り多いものにするには，意味コード付けの手法を

錬磨することが重要であり，広瀬英史「意味構造分析法の各分析法の紹介とその特徴」(『語彙史』18) は，コード付けの諸方法の特徴をまとめている。そこで扱われる諸方法はすべて『分類語彙表』をもとにしているが，構造化の枠組みはもっと色々にありえてよいだろう。独自の観点から意味データを蓄積しようとするものに，平澤洋一「言語文化体系化の問題点」(『城西文学』23,1998.3)，岡田袈裟男「『とはずがたり』の形容詞語彙について――基礎の部分をなすいくつかのことがら――」(立正大学『国語国文』36,1998.3) がある。平澤は，『守貞謾稿』における童遊びの記述をもとに意味特徴の体系化を試み，岡田は，『とはずがたり』の全形容詞が接続する動詞や修飾する名詞を，意味分類して一覧提示している。このような試みの先に何が見えてくるか今の段階ではわからないが，今後の発展が望まれる。

次に，特定の資料の総索引を用いた計量的研究としては，『平家物語〈高野本〉語彙用例索引付属語篇』(勉誠出版，1998.2)，『天草版平家物語語彙用例総索引』(勉誠出版，1999.2) の著者たちによる研究が目立った。濱千代いづみ・近藤政美「天草版『平家物語』の語彙の特色――語彙用例総索引と関連して――」(天草版索引の解説) は，高野本と天草本の付属語の比較表を示し，付属語の中世における時代的交替を数字で確認することができる。近藤政美・武山隆昭・濱千代いづみ「『平家物語』における動詞語彙の計量的考察」(『解釈学』22,1998.3)，武山隆昭「中古と中世のサ変動詞――『源氏物語』と『平家物語』を中心として――」(『椙山国文学』23,1999.3) は，『古典対照語い表』の源氏物語のデータと高野本のデータを比較するが，今のところ，作品全体における使用頻度の比較を越える考察は行われていない。古代語から近代語へのエポックを反映する平家物語の語彙の諸相が数量的に把握されることの意義は大きいので，索引作成の経験を生かしたデータ提示と分析をさらに期待したい。上田英代・村上征勝・藤田真理「源氏物語の会話文と地の文をめぐる数量分析――助動詞を中心に――」(『計量国語学』21-5,1998.6) は，『源氏物語語彙用例総索引』(勉誠社，1994.12・1996.2) の著者たちによる研究で，確かな統計的手法に基づいて，助動詞の用語の実態を巻別に把握したものである。各種資料のデータベース作成は進行中であるが，それらを生かした計量的語彙史研究の開拓はこれからである。その兆しとして，『古典対照語い表』データに『分類語彙表』コードを付与する作業が進行していることが注目される (鈴木泰「古典対照語い表と分類語彙表――「行く」を後項素とする複合動詞の場合――」(『国文学　解釈と鑑賞』64-1,1999.1) など)。

2.2　辞書

今期特筆すべきこととして中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』第5巻 (角川書店，1999.3) が刊行され，完結したことがあげられる。第1巻刊行から17年，巻末の「『角川古語大辞典』の完結にあたって」(島津忠夫執筆) によれば，計画の始まりは40数年前であったという，大事業であった。名詞の説明が詳細で秀逸な点が，文学や歴

史の研究者から高く評価されているが，動詞や副詞等，語学的にも工夫された記述も見逃せない(第5巻から例を引けば，「引く」「また」「まづ」の項など)。世紀の節目をまたいで，まもなく『時代別国語大辞典 室町時代編』全5巻（三省堂）の完成と，『日本国語大辞典 第二版』全13巻（小学館）の刊行が予定されている。こうして大規模辞典が出揃うことで，21世紀の語彙史研究は新たな局面を迎えることが予想される。

20世紀後半の語彙史研究をリードしてきた前田富祺は，このところ，「万葉の花――花の言語文化史序説として――」(『万葉集の世界とその展開』,1998.4),「食の言語文化史から見た『新猿楽記』」(『中古』)など，語彙史研究を言語文化史という視点でまとめることを提唱している。前田のいう言語文化史は，「言語文化史から見た『明治字典』――国語辞書史序論として――」(大阪大学『語文』73,1999.10)によれば，辞書史を包含するもので，「日本語基本語語誌辞典から日本語言語文化史大辞典まで」(『日本語学』17-12,1998.12)によれば，言語文化史の記述を集積した辞書を，この領域の研究成果の到達形態の一つと見ているようである。前田も言及している国立国語研究所が構想してきた国語辞典編集のための用例採集事業の最近の動向は，木村睦子・加藤安彦・田中牧郎「国語辞典編集のための用例データベース」(『日本語科学』5,1999.4)に整理があるが，事業の軸足が用例採集からコーパス構築へと移行してきている。21世紀の辞典編集や語彙史研究はコーパスなしには考えにくく，計量研究と辞書研究とがコーパスを介して結びつく可能性もあろう。21世紀の辞書像やその編纂方法を考えるためには，犬飼守薫『近代国語辞書編纂史の基礎的研究――『大言海』への道――』(風間書房，1999.3)のような，すぐれた辞典の編纂の実態を記述し評価することも，不可欠のことと考えられる。

文献の収集にあたっては，勤務先の情報資料研究部，図書館の協力を得た。

――国立国語研究所室長――